

明治三十一年十二月二十六日 郵政省第三種郵便物認可

明治三十一年一月十五日 創設

毎月二回（一日、十五日）発行

改教時報

社説

◎風紀の振肅 ◎公德の策勵

論説

◎如何にして信仰を求むべきか

社會

◎元勳老いたり ◎二十世紀の歴史 ◎宗教界 ◎國民の元氣餒ゆ ◎新年御用始の吉事
二件 ◎公德の養成 ◎大谷派本願寺宗憲調査 ◎支那の宣教問題

今井昇道

雜録

◎元旦の獨語

百目木劍虹

◎浩々洞の新年

◎紅葉狩（承前）

太田吾風

信界

◎友に與へて不滅の信仰を論ずるの書

（文學士）眞岡湛海

會報

◎信濃國（眞宗松代教會）

第四十七號

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し其學徳を高めしめ又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

風紀の振肅

近來社會の風教頹廢せるを慨歎する者頗る多く、口を開けば則曰く、社會は腐敗せり、曰く道徳墮落せりと、然れども世は季になれりとは余輩千有餘年前の物の本にも見る所の語にして、何れの世にも犯罪者は濱の眞砂の夫ならずとも絶ゆる時は無かるべきなり、世に進歩の理法行はるゝを許さば、犯罪の方術も亦日に月に進むは免るべからざる所なるべく、古人が缺坎の世といへるは是等をやいふべき、論者が理想せる黄金世界の如きは遠き將來には出現を見るを得べしと雖も、過去數千年の歴史に於て未だ見るを得ざりしは勿論、近き將來に於て之を自覺し得べしとは夢にだも想はれざるなり、去れば徒らに悲觀的にのみ世を慷慨せんは左迄に世道人心に利益あるべしとも覺えざるなり、去ればとて墮落も腐敗も極所まで到達すれば、酷烈なる霜雪を凌ぎて後に一陽來復するが如く、自然に墮落の所爲をなせる者彼自身に、其墮落行爲の却て已に不利益なるを自覺して、從前の行爲を悔悛し、各自に相戒むるに至りて、世は自ら風教振肅せらるゝ時期到來すべし、兎角は世の潮勢のまにまに放任し置くべしと、樂天主義に據へ居るも、志士の本分にもあらず、又墮落腐敗の極所に至るまで世は其弊に堪へざるべきなり、余輩は強ち絶對的

理想世界を現せしめんとあせり、眼前黄金時代を見んども、くものにあらず、然れども自己の棲息する社會が他の社會より一層墮落腐敗せる状態に沈淪せしを見るも、缺坎の世なり、不完全は人間社會の常態なりと、恬然冷眼視するに忍びざらば徳義の點に於ても、我此日本社會をして、他の人種の棲息せる社會の後へに墮若たらしむるを欲せざるなり、况んや如何なる墮落せる社會にも道徳の光輝を燦然發揮せしめ得べきを信する者なり、如何程腐敗せる空氣の中にも亦道徳の世界を開拓し得べしと信するものなり、白蓮華は汚泥の中に生じて而も其美色と清香とを汚されざるにあらずや、古來の聖賢が徳教を確立せし當時に想到せよ、孔孟が堯舜を祖述し文武を顯彰して、東洋幾千萬の生靈の爲に履行すべき道徳を唱出したるは、子其父を弑し臣其君を弑する闇黒時代なりしにあらずや、釋尊が无上の徳音を宣傳して、人類救済の大道を確立し給ひしは、彼が如く外道相争ひ、其國家も亦大難を免れざりし迷妄時代なりしにあらずや、其他大聖ソクラテスが終を善くせざりしは何の爲ぞ、基督が十字架上に磔刑の慘死を遂げしは何の故ぞ、具さに論證するを待たずして皆其當世の昏昧腐敗せるに職由せずんばあらざるなり、是を以て吾人は、古人が道義の世界を拓殖せんが爲には、其榛莽を排し、荆棘を除くに力めたる事の大なるを感謝すると同時に、今人亦能く忍び能く勉めて、憊む事なく撓む事なくんば、所謂世の木鐸となりて、腐敗せる零園氣中に在りて能く徳義の光彩

○政教時報第四十六號目次

社説 初刊の辭 (健全なる宗教界を形成せよ) ●第二十世紀を迎ふ
 論説 所謂歐米の文明と人道 (文學士) 和田鼎
 會説 三週年を迎ふ ●嗚呼新年 ●眞宗高田派の美譽 ●當路者の曰く等
 雜錄 學生の宗教心に關する調査 ●紅狩葉 (太田吾風)
 信界 精進の心 (文士) 清澤滿之

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
 一、本誌代金は必ず小爲替にて送附の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無
				送
				料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
 發行所 大日本佛教徒同盟會出版部
 明治三十四年一月十五日發行
 甲 發行編輯人 流上村幸三郎

を發揮せしめ、道德の世界を別開し得べからざるにあらざるを確信する者なり、去れば不満足の事のみ多き現實の社會に在りても、徒らに悲憤慷慨するを止め、又冷然放置するを爲さずして、人々皆自ら堯舜たらん事を誓ひ、菩薩行を行せん事を志し、世道人心の爲に盡さんとせば、風教の振起も決して不可能の事にはあらざるなり。

公德の策勵

唯一口に風教と云ひ道德と呼ぶ、道德にも公德あり私徳あり、由來東洋諸國は私徳は大に發達して、其學說に於ても其實行に於ても見るべきもの多く、我日本の如きは、維新の大變に際して、舊來の社會組織盡く破壊せられしを以て、私徳の點に於て大に退却せし事實あるといへども、猶今日に以ても人後に落ちざるべきは、之を親しく歐米の社會を視聽觀察せる人士に糾し、又書かれたる文字を見るも信せらるべきなり、唯惟り公德の點に至りては遺憾ながら、一步を彼に輸するものあるは衆の認めて以て然りとす所にあらずや、去れば私徳固より退かしむべからず、否猶一段の進歩を圖るべしと雖も、公德振起問題は一層急要なるを唱道せんと欲するなり。公德振起策種々あるべしと雖も、余輩の信する所は、社會的制裁を大ならしむるより先なるはなし、而して其社會的制裁の爲に耳目となり、又發聲機關となるものは、新聞雜誌を以て最とす、若し夫新聞雜誌にして眞個に自己の天機を覺り、健全なる良心、健全なる判断を具して、能く社會の耳目となり、發聲機關となる時は、其片言隻語は以て王公をして震恐

せしむべく、相將をして悲喜せしむべし、英國等に於て新聞紙の勢力の多大にして、或新聞紙の如きは、英國社會に無冠の帝王たるのみならず、其所論は世界の耳目を聳動するに足るもの、職として此天職を眞摯に盡すに外ならざるなり、顧て我國の言論社會を見よ、能く其天職を自覺せるものありや、彼朝に起て夕に仆る、如き小新聞小雜誌は措くも、堂々たる大新聞紙と雖も、時には利の爲めに僞電を公にせるを聞く、爲にする所ありて他人を攻撃するあるを聞く、甚しきに至りては、言ふにも聞くにも忍びざる惡徳を敢てすといふにあらざるや、去れば讀者は新聞紙の記事は何に由らず、半信半疑を以て之を迎へ、新聞社の内情を知る者程、却て其記事に信を置かざる如き奇現象を呈せるにあらざるや、見よ或る公人は公の責任ある場所に於て、新聞紙は事實を捏造するものなりとの定義を下せし事を、近日東京市を初め諸地方に於て、公德腐敗問題起る、新聞紙の之を攻撃するの聲大ならざるにあらざるも、其効力比較的の小さなは、新聞紙が多くは皆其天職を自覺して忠實至誠に盡さんと欲するの念なくして、利の爲に筆を曲げて却て自ら公德を破るの行爲を間々爲し兼ねざるを以てなり、又阿黨比周して偏私の所論多きを以てなり、全體黨派の機關新聞紙なる者は、是非善惡を論せず、自黨を庇護して、他派を貶毀すべきものにあらずして、外に向ては自黨の主義を主張し他派の缺所を指摘駁撃するは勿論なりと雖も、又内に向ても、其曲たり非たる點には規箴警醒を加へざるべからざるなり、然らざれば社會の耳目といふ第一義の

論 說

如何にして信仰を求むべき

今 井 昇 道

本領を忘れて、一黨一派の機關といふ第二義にのみ走るなり、斯くの如きは社會民人の害物たるのみならず、自黨も知らず識らず邪惡を敢てするに至り、最負の引き倒しとなり、自黨派の不利を招くものなり、此本領を忘れて、黨派の機關と言へば一概に自毀他するものと誤認せるを以て、多くの新聞紙は其實は黨派に屬し其機關となりつゝも、陽には不倫不黨と號し、黨派に無關係の看板を掲ぐるといふ、耳を掩うて鈴を盗む如き痴態を演ずるを見るなり、斯くの如きの徒にして、如何ぞ社會の耳目となり、公德の指導者と爲り得べけんや、然れども余輩は新聞紙の天職は、社會の耳目、公德の指導者たるに在りと信ず、否新聞紙の本領を茲に置かしめざれば、社會の腐敗を匡救するに於て、最大機關を奪ひ去らるゝなり、之れ經世家の堪ふる所にあらざるなり、若し新聞紙の天職本領を此處に置かしむれば、新聞紙自ら公德を破る如き行爲言論ある時は、他の新聞紙は總揃にて之を攻撃するの風を養ふべし、斯くすれば自ら新聞紙の風品も高まり、本然の天職を盡すに至るべきなり、若し夫れ斯くの如く新聞紙の品位を高めんと欲せば、新聞事業に従事する人を精選せざるべからず、「新聞社氣障な學者の捨て處」と京童をして誑はしむる間は、新聞紙の品位も高まらず、信用も薄かるべき道理なり、故に余輩は社會の風記振肅の第一着手として、頽風挽回、公德上進に志ある紳士の奮て新聞事業に従事せん事を希望するなり。

宗教問題は、十九世紀末葉に起りて今後此世紀に於ける一大問題なり、我國の學者識者各之に關する意見を公開し十九世紀最後に於ける日本史上の一偉觀たりき而して其所論大體に於て一致するが如し
曰、從來の宗教は佛耶神儒と婆羅門印度、マホメット教とを云はず其世界的宗教と稱するも皆各、時代精神を含み地方的特質を有す隨て此等の宗教は科學哲學倫理思想の進歩せる今日の東西兩洋の人衆を感動支配するに足らず、此を以て未來に出る宗教は、必や此の如きものならざるべからずとして、各其豫想を公開せらる其屬性として希望する所のもの蓋左の六個に歸着す

- 第一、……未來の宗教は科學的ならざるべからず
- 第二、……哲學的ならざるべからず
- 第三、……倫理的ならざるべからず
- 第四、……世界的ならざるべからず
- 第五、……理想的ならざるべからず
- 第六、……現世的ならざるべからず

吾人は此六個の屬性に就て餘り多くの異義を有するものにあらずされど吾人の茲に云はんとする所は此等の豫想は、單に學者の態度を以て宗教の分析的結果、得たる所の結論にして隨て如何にせば此等の宗教の得らるべきやに就て何等の意見なきは之學者の態度として固より其所なりされど予輩は學者にあらすして宗教を求めんとするものなり宗教を求めんとするものは、更に之を得るの方法に就て學ぶ所なからざるべからず是予輩が少しく其意見を述べ敢て大方の高教を仰がんと欲する所以なり

宗教は信仰の發動にして信念は宗教の精髓なり、完全なる宗教を求むる者は、其精髓たる信仰を獲ざるべからず然らば其信仰とは何ぞこれ智識に非す又教條に非す人心全體を感動して、確固不移の地盤となり、意志と感情を規定して一切身意の支配者たる靈妙なる生命活力なり、

宗教に於ける精神は實に此生命にして上は高等なる佛耶兩教より下は劣等なる自然教に至るまで苟も人心全體を感動し之を支配する者は一として之を有せざるなし此生命此活力當時の時代智識時代道德に發動して、茲に幾多の宗教は、形成せられたり故に宗教は、其形式に於ては、固より幾多進歩の段階を顯はし優劣一ならずと雖、其宗教として人心を感動する價値に至りては蓋同一なり

信仰は作爲すべき者に非す

信仰は既に生命にして形式に非すとせば、是人間の作爲すべきに非る事勿論なり吾人に日進月歩の科學に依り人爲を以

き者は、特殊なる人心に顯はれざるべからずとせば普遍的不變の宗教を現界に求むるが如きは、蓋これ一個の謬見に過ぎざるのみ

信仰は如何にして得らるべきか

既に宗教の精髓は、人心に降誕すべき生命活動力なるが故に吾人は未來の信仰に就て此の如き宗教なるべしと希望し、豫言するも唯は一介の希望豫言にして決して、此等の信仰は、與へらるるものに非す又與へられたる信仰は必しも嚴密に此希望と一致する者に非す然らば吾人は如何にして求むべきか是予輩の少しく言はんと欲する所なり、

信仰は、「インスピレーション」なり、

信仰は、作爲に非ずして與へらるるもの即他より吹き込まらるる者、隨て一種の「インスピレーション」なり予輩今、信仰の與へらるる準備を知らんと欲せば、勢其種たる「インスピレーション」に就て考察するを要する「インスピレーション」は、如何なる人又如何なる時に於て與へらるるか之を詩人に於て見よ、歐洲十一世紀間沈黙の辨護たる偉大の傑作は、敬虔至誠なる「ダンテ」が其身心の攪亂躁躍の極、與へられたるものならずや人情の福音たる「セクスピア」の傑作、世界的聖書たる「ファウスト」の著、降りて「シラー」「カーライル」の作に至るまで其人物に於て其時に於て、全く其規を一にす、繪畫彫刻に於て、我未多を知らずされど、「ラファエル」の畫「フジラス」の彫刻又、其軌を同ふするに非ず、

「インスピレーション」の最極なる信仰又此と同じ、王宮春

て幾多の事物を造る事を得云く人造麝香、云く人製絹、云く何、曰、何然れども吾人は以て一人の生命ある人間を作る事能はず否唯一疋の蟻すらも今日に於て又將來に於て決して造り得べからざらん、換言すれば吾人は幾多の要素を以て或形式を造り得べし然れ共生命に至りては、到底人爲の如何ともすべからざる所なり

宗教は特異的暫有的なり

信仰は已に人の作爲に非ず、然らば他より與へらるる者ならざるべからず然らば其與ふる者奈何吾人之を知らずされど信仰の與へらるるは事實なり而も其與へらるるや、抽象的公共的普遍的に非ずして具體的特殊的個人的なり佛敎然り基督敎然り回々教然り、

既に信仰は個人の上に與へらるる故、信仰其物即生命活力に至りては、古往今來變化なしと雖、其意識の上に發動し、確と之を攪むに至りては、其個人の特性と其時代の思想とに順應せざるべからず隨て宗教として顯はれたる上は、既に特異的なるが故に萬人必しも信仰せず萬世必しも之に依り得べきものに非ず從て如何なる宗教も特殊的且、暫有的たるを免れず

勿論、吾人は、吾人の理想として、歴史の過程に逼通せる、普遍的宗教の存在を認む然りと雖、此等の宗教は、若特殊的なる吾人を動かさんと欲せば勢ひ特殊的なる人類の心中に降り特殊的の形式を取らざるべからず茲に於て初めて、偉大な感動を顯はす、宗教は、既に人を感動すべきもの感動すべ

の花の陰、老病死を見て、人生の真相を觀し萬乘の尊を捨てたる憐愍摩羅尊は敬虔至真の人なり、勤苦六年の煩悶吾人の思ふ毎に胸痛む、成道は此苦悶の賜ならずや基督に於て然り、「マホメット」「王守仁、老、莊に於て然り、「ルーテル」「クロムウェル」「バンヤン」に於て又然り、善道法然日蓮の諸大師又實に之ならずや特に我聖親慈は實に真摯謙沖の化身彌陀大悲の信念は比叡山上不死無限の痛苦に依りて吐血絶息の結果、玄冥よりの賜なり、旁に此等偉大顯著なる人のみならず真正なる基督信徒日宗信徒、真宗門徒は、其無智魯鈍の野翁田舎茅屋の老嫗も信仰の過程又全く之に同じ

煩悶は人生の眞旨趣を見るに依る

眞摯なる人は何ぞか見、又何に於て然かも煩悶するや人は、父母の愛に、夫婦の愛に、名利の慾に、希望の夢に誑惑せられ、迷夢を破るべき幾多の叫聲は、死の惡魔として、无常の殺鬼として、逆境の不運、強裂なる苦痛として、彼等の目前に現すと雖、苟且偷安難化の性情、雲烟過眼視して常に眼外に逸するに反し、眞摯敬虔の靈は、一閃の光に依りて、直に人生の眞意義に想到す

我は何ぞ我運命如何、死とは何ぞ生とは何ぞ、死後に於ける我運命如何、是絶對の死か、若然らば之に對する人生の旨趣奈何、死若絶對の死に非すとせば、永劫に於ける我運命奈何、苦か樂か、苦なりとせば如何にして之を脱すべき、迷か悟か、迷ならは奈何にして之を解るべきか、此意味に於ける人生の旨趣如何、我は、何とかが爲し、又何をか營むべき、古來

の偉人東西の聖者、此に對する解釋を異にし、隨て自他方の
門分れ、一神汎神の別を生じ世界に於ける宗教界は茲に千態
萬狀の莊觀を呈せるも、要するに以上の解釋に對する敬虔な
る至誠に外ならざるなり、

信仰を求むる人の態度

我信仰を求むと云ふ、之既に、呑氣、况や筆に口に猥に之
を叫ぶ予輩實に慚愧に任へざるなり、我等若、敬虔至誠古代の
偉人の如くなりせば人生の此玄怪に於て、沈思寡黙の中に
靜に動く大洋の大波の如き、沈々たる幾多の煩悶と、青白と、
无言の恐怖に依りて眼を見張り、唇を嚙み死の如き而影を以
て永却に向はざるべからず我には科學の智識あり倫理の思想
あり、哲學の頭腦あり、世界的廣量あり、此心を以て舊來の
教儀を疑ひ信條に安んぜず自ら進みて此解釋の任に當る若吾
人の至誠にして、深遠雄大沈黙寡靜血に泣き、渴に焦げ求め
て止まずんば茲に吾人の渴仰する靈活なる信仰は降誕し、學
者の希望識者の豫想は、基督出て、豫言者の希望に應したる
が如く、頓て果遂應報の時あらん

要するに今日に於て吾人の憂ふる所は、宗教の豫想に非ず
形式に非ず唯、沈黙寡言、を被むりて、生死事大の解答、人
生の眞意義に全身を捧ぐる謙沖至誠者のなき事之なり予輩は
最後に我先哲の言を附記し、以て自己鞭撻の具に供と、

求めよ然らば與へられ尋ねよ然らば遇ひ門を叩けよ然らば
開かるゝ事を得ん、
いたりて堅きは石なりいたりて柔なるは水なり水能石をう

がつ心源若徹しなば菩提の覺道何事か成らざらん、

社 會

元勳老いたり

吾人は舊自由黨内に星亨氏等の勢力隆々として、飛ぶ鳥も落
さんばかりの狀あるに引き換へ、其創立者たる板垣伯は唯辨
髦として虚位を充つるを見る事久しかりき、然れども是唯板
垣伯の老いたるに過ぎずして、伊藤大隈等の諸老は猶健在な
るべきを信じて居たり、茲に第三次伊藤内閣、及憲政黨内閣の
御手際を拜見して、稍南老の健在を疑はんとしたりしが、
今は漸く之を確信するに至れり、過般伊藤侯が天下に呼號し
て、政黨改造、首領專制を標榜として立憲政友會を組織する
や、其宣言の美なる、言々何々從來政黨の弊實に當りたれば、
吾人は天下と共に大に之を歡迎したりき、一黨以て下院の過
半數を制するの會を組織し得たるは、以て天下の人心を察す
べきなり、然れども山縣内閣辭職して、新内閣組織の大命侯
に下るや、侯は躊躇逡巡、日又日を経て漸く難産内閣を組成
するや、否や又直に貴族院會の反抗を受け、遂に一内閣員を
辭職せしめ、而して其人には衆議院の院内總務を以て名譽を
與へ、漸く兩方の顔を立て、一時を彌縫せり、其體裁如何に
も不始末にして、假令最良目を以て見るも、昔日の腕は認むる
能はず、加之堂々たる大政黨の宣言をして、効能無くば金干圓
進呈すへしと二號活字で廣告するど一般ならしめしは、之を

二十世紀の歴史

奈翁の歴史は十八世紀を花とす、十九世紀に入りては失敗の
迹のみ多し、我元老の歴史は十九世紀を盛とす、二十世紀に

東京、静岡、佐賀等の不始末を如何ともする能はざるに徴し
て吾人の大に悲む所なり、觀し來れば政友會内唯星氏等の勢
力のみ閃々輝き獨裁首領は何處にドーして御坐すやら、
板垣伯自由黨總理の當時と何程の變り目をも見出す能はず、
侯や老いたるか否か、唯一種の勢力を黨人に利用せられて、
信を上下に失ふ無くんば幸なり、政友會起つてより、憲政本黨
振はず、遂に其組織を一變して遂に大隈伯を引いて名實共に
總理の椅子に据ゑたり、之れより本黨は多少の活動を見るな
らんとは吾人も想像せし所あるに、爾來の消息香たり聞た
り、新聞の伯の言論を傳ふる者は、皆伊藤侯政友會等の批評
のみ、然らざれば現下無責任なる對清策等なるのみ、其言往
々肯綮に當らざるにあらすとも雖も、其將ある政黨の行動に至
りては、餘りに微妙なるか余輩近眼者に見る能はず、去れば
二老共に腕の時代は十九世紀と共に去れり、唯目と口との巧
者を増せるのみ、別言せば小錦として土儀上に角闘せんは最
早二老の堪ふる所にあらず、二老如何に負けぬ氣なりども、
寄る年波には勝たれど、寧ろ二十山として、徐に四本柱に馮
り、眼と口とを働かして後進を監督するに如かじ、伊藤兩老
己に然り、他は論ずるに及ばじ、

宗教界

入りては洞悉の記事のみ、猶奈翁の十九世紀に於けるが如く
ならん、然らば二十世紀初半の歴史に頁を理むるの人は唯ぞ、
近衛公か西園寺侯が、將た革丙子か晨亭男か但しは太郎將軍
か、若くは又日生、木堂、學堂の諸氏が、
政治部面に變化を來せるは上の如し、宗教界に變化を來せる
は猶之れより甚しきものあり、南溪、龍温、行誠、環溪、獨
園等の諸高僧の逝けるは己に昔話となりぬ、近く昨年に於て
も眞宗の七里、調、廣陵の諸老、禪の峨山、天台の奥田師踵
を接して寂を示され、今や曠北に馬なきの感あり、由來大徳
大學者の何時の世にも存せん事を望むは無理の注文なれば、
今の世に之れ無きも致方なき次第ながら、何れの宗派にも自
宗の教義に精通せる人、所謂宗乘學者の大家の二三人つゝは
有らまはしく思ふは、強ち理不盡の注文にもあらざるべし、
而して今や此宗乘學者なる者、各宗派皆寂々寥々として之れ
あるを聞かず、又今後輩出せんとの見込も立たざるは、何ホ
一心細き事ぞや、

國民の元氣餒

頃日來の新誌の報する所を見るに、他は暫く措く、其政事部
面に於ては、隱居部屋の樞密顧問官は斯々の決心を爲せりと
か、從來氣樂院と綿名せし所の貴族院の有志者は現内閣に反
對の臍を固めたりとか、伊藤首相に會見したりとか、其勢中

々凄まじく、遂に一内閣員をも退職せしめし程なるに引き換へ、衆議院の消息は一向に聞く所なし、政友會内のゴタ々等は何度耳にすれども、政黨らしき活動を見ざるは何れの黨派も皆一なり、眼前増税問題の如き大問題あるにも拘らず、其賛否の聲さへ、其眞摯なるものを聞き得ざるにあらずや、假令政略にもあれ煽動にもあれ、かの地租増徴問題の當時の如きは之を傍觀するにも爽壯の感ありき、今や唯何かの爲にせんとて陣笠連のワイ々騒ぐあるを耳にするのみ、夫れも政府黨の内に非難の聲を聞く如き奇觀といはば言へ、余輩は之を以て國民の耻辱と呼び、元氣、餒乏たるの證なりとす、元氣は老ゆるもよし、老僧は死するも致方なし、唯々國民の元氣の餒乏たるのみは捨て置くべからず、願くは一陽來復の氣候と共に清新健全の元氣を回復し來らんことを、

新年御用始の吉事二件

(孝子の賞與と特赦)

周布神奈川縣知事は本年の御用始として去四日左の孝子に賞與せり本人は目下横濱市戸太町戸部伊勢町三丁目七十七番地に父母と一姉一弟一妹の家族六人にて暮せるものなりと云ふ

石川縣金澤市仙石町三十二番地
士族 田邊寛二男 田邊武三郎
吉村雅藏
弘化二年四月生

資性直實貧窶の中に在て克く父母に事へ父母老て生業倍々艱難の状あるや明治二十九年甫めて九歳懲勸其勞を分たんことを請ひ晨昏納豆を齎さ雨雪を厭はず克く困苦に堪へ僅

に其得る所を以て家計を輔け餘暇郷費に入り師訓を守り爾來々益拮据業を劣め懇篤孝を盡せり洵に奇特とす仍て爲其賞金一圓下賜す

去る四日政治始の當日、特赦の恩命に接したる者左の如し

秋田縣北秋田郡東館村中野平民 本間 所の

右は去る三十年一月二十九日秋田地方裁判所にて故殺罪にて重懲役九年の刑に處すべき言渡を受け同日より秋田縣監獄署にて刑の執行を受け三十九年一月二十八日其一執行を終るべき處を今回特赦せられし者にて今日迄の入獄時日は三年餘なり

岩手縣西磐井郡萩の庄村大字達古袋平民 佐藤 ゆき

右は去る三十年五月十四日盛岡地方裁判所にて故殺罪に問はれ重懲役九年に處すべき言渡を受け同七月二十七日より岩手縣監獄署にて刑の執行を受け三十九年七月七日其執行を終るべきの處今回特赦せられし者にて入獄年月三年餘

岩手縣東磐井郡八澤村大字砂子田平民 小野寺 長三郎

右は去る三十年三月四日宮城控訴院にて故殺罪を以て問はれ重懲役九年に處すべし言渡あり同年三月四日より岩手縣監獄署に於て刑の執行を受け三十九年四月十六日其執行を終るべき處今回特赦せらる入獄年月三年餘

廣島縣廣島市段原村平民 吉村雅藏
弘化二年四月生

右は去る二十九年三月三十一日廣島地方裁判所にて故殺罪を以て問はれ重懲役九年に處すべき言渡あり其後明治三十年勅令第七號に依り輕懲役六年九月に減刑せられ同年三月三十一日より刑の執行を受け明年十二月二十五日同縣監獄署にて執行を終るべき處今回特赦せられたるものなり入獄經過年月四年餘

公德の養成

我國民の一大缺點として余輩の常に慨嘆する所のものは、公德の缺如これなり、讀賣新聞は頃日公德の養成と題して連載する所のもの、頗る吾人の同感に堪へざるなり、記者は絶叫して曰く、我國民の公德如何と省るときは、余輩は遺憾ながら愧汗の背を濕すに堪へず、我國民は人に對するの禮を知らざるなり、社會に處するの道に知らざるなり、公共の義務を知らざるなり、其忠實義勇平生之を口にし特別の場合に於ては往々之を躬にするに拘らず、其自ら社會に處するを見るに、人は人たり我は我たり、他人の迷惑も氣に留めず、社會の損害も意に介せず、公共の利益を進むるは又自己の利益を進むる所以のものたるを思はず、縱令之を思ふも容易に之を行はず、其結果外に對しては國家の面目を傷け、内に向ては社會の秩序を紊し、豈て文明國として萬國の公認を得る能は

ざるのみならず、我亦堅實なる道德の上に立つ眞個の文明國となる能はざるに至るべし、

余輩は所謂歐化主義に反對するものなり、然れども歐米諸國に於ける公德の醇美堅實なるを聞く毎に、未曾て其國家の繁榮社會の隆昌皆多く茲に基するを認めずばならず、我國民の公德にして前上の如くんば、我國の文明は歐米諸國の文明を距る頗る遠しと謂はざるべからず、と論結せり、

以上は大體の旨意を摘載したるに過ぎずと雖も、所論一々肯綮に當り、公德の養成に就ては大に注意を乞はざるべからず、而して記者は更に項目に互りて詳論せられたり、これ亦一讀を要せざるべからざるを以て、左に重なる項目のみを掲げん

- 一、西洋にて公園の花を折らざる事
- 二、米國にて郵便物安全の事
- 三、英國の印刷會社の正直なる事
- 四、我國にて官衙會社等の用紙を使用すること
- 五、我國の書生が書籍館にて書籍を暴ること
- 六、女子服裝の改良は朝廷より達せられたること
- 七、我國にて落書流行の事
- 八、佛國にて車賃は筒へ投げ込む間違なき事
- 九、錢湯にて放埒の事
- 十、乗合馬車、瀛車、瀛船内等にて傍若無人の事
- 十一、英國選舉の公平なる事
- 十二、葬儀の行列を横切る事

十三、職人間に約束の時日を守らざる事
 十四、教育者最も公德に欠乏せる事
 十五、郵便局員が書籍雜誌等を持ち歸り或は切手を胡魔化す事

十六、輸送中に貨物類紛失の事
 十七、道路通行の事
 十八、約束の時間を遵守すべき事
 十九、米國にて停車場、爲替受拂口等の秩序整然たる事
 二十、取引に對する違約の事
 二十一、英國にて鐵道の手荷物の合鍵の不用なる事
 二十二、獨逸にて小兒も公德を重する事
 (尙未完に屬する分は追て記することあるべし)

大谷派本願寺宗憲調査

現行宗制寺法中改正を要する條項少からざるにより、新に宗憲なるものを制定せんとて宗憲調査會議を設置し、石川寺務總長以下各局部長に調査委員を命じたり、依て不日委員會を開き宗憲及び附屬法規の調査に従事する筈

支那の宣敎問題

倫敦駐在の支那公使の秘書官某氏は、近頃デーレーメールに寄書して、支那宣敎に關する意見を述べたるよし、某新聞に見えたり、依て左に其要旨を掲げん
 最も吾人支那民をして憤怒に堪へざらしむるは外教信者に

雜 錄

元旦獨語

劍 虹

◎智の人あり情の人あり、智性の人と雖ももとより情なきに
 ならず、即ち智は七分にして情は三分に過ぎざるなり、情の
 人に於けるも亦然り、智は三分にして情は七分に近し、之を
 以て情の人は波動的に進むも、智の人は之に反して一直線に
 進むなり、一は何等の主義なく、主張なく定見なし、所謂八
 方美人のなり、一は主義あり操守あり、故に動もすれば
 頑固に流れ狷介に陥るの弊あり、吾は主義なく主張なきもの
 とならんよりは、寧ろ狷介に陥るも一定の主義によりて濶
 歩せむ哉。

◎主觀的人、客觀的人ありとせば、情性は客觀に屬し智
 性は主觀に屬するが如し、主觀的の智の人は先づ自己の利害
 損得を打算して而して後事を行ふ、其行爲往々酷に失するこ
 とあり、これ大に憤らざるべからず。

◎人怨恨なき能はじ、侮られ、辱められ罵らるゝに遇へば、
 報復の一會勃焉として禁する能はざらむ、而も復讐の力量足
 らずして無念やるせなきか如きことあらば、これ洵に千古の
 恨事にあらずや、徳を以て怨に報ゆるはこれ君子者の言なり
 ◎何ぞ人の彼に厚くして此に薄きや、情の露は他にふりかゝ
 り未だ曾て我身を濡ふせしことなし、猥りに人に依頼するは
 却て人を怨むの基となることあり、人は必ずしも吾に親切な

轉宗したる者が其自國の法律の支配を脱し去る件なり試み
 に思へ若し佛敎の僧侶が英國に來り其敎旨に歸依して従前
 の宗旨を改めたる者は盜人と云はず拘模と云はず殺人犯と
 云はず皆警察官の捕縛を遁れ得るものとすれば公等の感情
 果して如何又試みに思へ英國に注入されたる新宗教は市井
 無賴の徒をして倫敦の貿易の利を壟斷し不正を働いて尚ほ法
 網を脱せしむる結果を造り出すとせば果して公等は甘じて
 此無狀を默視し得べき乎英國人にして必ず手に唾して起つ
 べしとすれば何を獨り我支那民の此軌例に洩るも理あらん
 や由來我國の文明は悠久なり同じ一平方哩の面積にも他文
 明國の收容するより多くの人民を住ましめて生々化育の樂
 を享けしめつゝあるなり基督敎の宣敎師が中國に入込む前
 には我犯罪者數の全人口に對する割合は實に歐洲中最も徳
 化したる地方と呼ばれ居る新敎の普瀾西亞のよりも少かり
 しなり何を圖らん外教の宣布以來急に犯罪者を出す斯く夥
 しからんとは我文明の種類が歐洲のと異るとするも現に我
 民情に適合し居るにあらずや此種の文明よりも一層良
 好なる而かも我國人の立場より觀て眞に一層眞善美なるも
 のが入れ代へられざる以上は決して舊來の文明を廢棄せん
 どの意秋毫も之れ無きなり是を以て外國宣敎にして支那の
 國制組織に干渉するを止めざる限は又大帝國を通じて無人
 望なる宣敎事業の保護に當る程北京政府の老蒙せざる限は
 支那の平和は到底望むべきにあらず云々

るものにあらじ。
 ◎古人の書體を學ぶ、徒に其形體に拘泥せむか、恐くは其人
 の右に出ること能はざるべし、今の人物崇拜論者も亦此弊な
 きが、苟も其人物の模型以外に逸せざらんとて汲々勉むる
 は、却て遠く其人に及ばざる所以にして所謂虎を畫きて猫に
 類するものならむ。
 ◎己に諛ふものを以て、己に服し且つ従ふものなりと思ふは
 愚の至りなり、人は故なくして己に服従するものにあらざれ
 ばなり。
 ◎人を容るゝ量なきものは、遂に大事を爲す能はざるなり、
 ◎我面前に於て、大聲吾を罵るものあらば、吾は永く畏友と
 して敬せん哉。
 ◎身を横へて病床にあり、苦悶限りなき時に當り、友の辭
 に我手を握りて温き同情を寄せらる時は、吾は恍として身の
 苦悶を忘れ、命數剎那に盡さるも、吾は少しも遺憾なしと思
 ふ。

浩々洞の新年

◎浩々洞の諸子は清澤先生の出陣を促して、元旦早々歌がる
 たの戦争に餘念なく、初めは下の句のみなりしが、二三日の
 中めざましき程發達して上の句をも讀むことに相成候、一日
 より七日迄の一週間と云ふものは、歌がるた計にて、しき新
 年を暮し候
 ◎最も歌かるたに熱心なるは常磐君なり、浩々洞にも度々挑

戦に來られ候、眞岡君も頗る上手にて我々の遠く及ばざる所に候、浩々洞の前にすまひなされる、中川理學士は眞岡君より一層上手に候、本多君はあまり威服仕らず候、未だ御手並拜見せざれども、和田、藤岡、吉田の三手は儘に一方の驍將たる手腕を有し居らる由に候

◎浩々洞の健談家は山友君と月見君に候、雜煮餅十三個をみん事にくひ申候、清澤先生も割合に健談の方に候、幾個お上り成されしやは聞き洩し候
◎浩々洞第一の朝寝坊は非無君に候、次は僕、其次は月見君に候

先は新年のあらましザット如斯御座候早々

紅葉狩 (承前)

太田 吾 風

二十八日 小春日和のさ々晴に呼出され落葉に埋みし細道を下り薬師の湯に一浴せんと音なへば家の蔭より姉妹と覺しき子供出で來たり浴室に案内して去りぬ浴室は狭く陰氣にて一人の客もなければ氣も勇まらず子供の方にいたれば家に續きし山の萱を菊居たり母屋より僅か下りて六尺四方位の湯壺あり傍よりぐつぐつと熱出る湯に清水をわり土に小溝を掘て流し込む熱湯なり一浴も一興ならむと這入たるに温度我に適ひ芒は頭の上に戦ひ紅葉敷込み美どりの宮に白雲の走る影を淨め何れも樂みの種ならざるはなし只氣にかゝるは彼の晝菊女子なり姉は十二三なるべく妹は十才に滿ざるべしさまぐ慰め問けるに父は此夏歸へらぬ客となり母は誰へ田坂にゆき四五

二十九日晴

掃よせた紅葉の上やけさの霜

造化のたくみを見むと後ろの山に登り木の根に躓き小笹に這るを踏しめ、巖に攀ち上り落葉掻よせ敷物として座したるも妻子を捨て佛果を得んどの願ひにもあらずこゝにもまたうき世の人の問來ればと世を厭ひたるにもあらず唯四五日の閑を得て藝外に遊ばんとするのみされど此好風何ぞ吾ひとり樂しまんや筆に誌して來ぬなるも樂しませんと矢立を出し筆を執れども無能短才我樂みの萬部一にも書せざるは安筆の穂先の切たる科にもあらむ無學の詞の盡たればなり先づ座したる山よりしるさむ

夫東館山は南面して肘を張り膝に手を置たる状ちにて湯の出る處は臍に當り座したる巖は胸になるべし正面に高きを坊平といひ汗漫の瀧此山より落つ北御出し山志賀山これに並び寂たる色は古代の錦と疑れ笠嶽小笠嶽は其後ろに黒く天に聳え白雲間だにかさなり低き野山は山勢東より西に向ひて長く横はり蒲團着て寝たるに似たり其西端に少し高きを朝日山といひ丸くやさしく若洲山の傍に叶へり芒は夕日に戦き松風泰半を謳ふ頭をすこし西に廻らせば遠くは戸隠の裏山劍の嶺より鎗ヶ嶽迄の峻嶺奇峯雪を頂き銀屏を立たるが如し劍と鎗との南嶺は治に居て亂を忘れざるの趣わり水田更級の小山は其峯幾百なるか算ふべからず長野の人家は老眼に届かず午時は午鉦の音を聞き夜は電氣の光りを見る人工をかりて耳目に觸るは此二ツのみ餘はいづれも造化の神の爲せる業にあらざ

日の泊り翌日は歸るならんどの物語りには語る者より聞く者のうき此深山の離れ家に女子二人に留守を預け幾夜かけての泊りとは扱も氣強き母なる哉さり連二人を疎むにあるまじ市中に住る人々は斯る哀れは夢にも忘るまじいづこもおなじ秋の夕暮とかこちし法師もこの夕暮はよも知るまじとおもひ續くれば胸ふさがり詞も出ず宿に歸りぬ
蝶二つ見付て悲し秋の暮
雨よりも霧におもたき障子かな
花はみやまに咲いり紅葉はみやまよりもみいづると今更のやうにおもひ「峯は散り麓の色はこがるゝにまた庭もせに薄きもみち葉」と法師の歌も實に此山も峯の紅葉は散果て處に色よきも「暮たれば唯の樹になるもみち葉」とは鼠年もよく讀たり「眠の態に登り過ぎけり紅葉狩」とは幹雄もよく吟したりと月に嘯けば麓の方に人聲あり亭主の歸りなるらんと待けるに舍弟と俱に炭を負ひ頼母しげに登り來て僕をおろし汗を拭きながら途中にて一句出來たりと「炭籠やけふもふりて日の暮る」此人にして此句あり名吟とはかゝる句をいふべきか其夜亭主は我徒然を慰んと柴栗を盆に入れて來たり四方山の咄しの末何故に斯は任荒たるやと問へば養父は六年前に遠行し養母も三年前に其後とを遂ひ跡繼なきより養父の生家より老婆一人來たりて世話をして今の亭主は養子と成て此月十五日の乗込にて予は當代の初客なりと明春は浴室を建替座敷の破れを繕ひ谷一杯に梅を植る計畫なりと
笠道添うて川音しぐれ哉

るはなし青葉は五月中頃よりをよしとし鶯、駒鳥、時鳥、時啼かはし紅葉は十月中頃迄を見頃とす山高ければ水清く溪の流は滔々ど南に落ち小鳥は東西に嘯り兎は芝生に戯むる四時を友とすれば見る處花にあらざる事なくおもふところ月にあらずといふ事なしとは斯る境をいふなるへしもし此道往昔に開けなば探幽は筆を投げ西行は庵を結び利休は落葉を焚しならむと筆を捨て下りぬ (完)

雪かけの續いて通る昔かな
○吾風翁又本年元旦の作なりとて寄せられたるは左の如し
露も英もなかくて居るや初日の出

信 家

友に與へて不滅の仰信を論ずるの

書 (其一)

文學士 眞岡 湛海

「嗚呼不滅の信仰に非ずんば到底我を慰むること能はず」と是れ近頃眞熟なる一學者が其父を失ひて發したる一語なり。「嗚呼余今我半身を失ふ我事既に終る」と是れ近頃一友人が非命の最期を遂げし時、その兄君の發したる慟哭の一語なり、嗚呼何ぞ其言のしかく悲愴切實なるや。予嘗て父を喪ひ、姉の墓前に泣き、又屢々友人の喪に會し、或は失望落膽の淵に沈み、或は浮世の無情を嘆せしこと再三ならず、頃者二氏を傳ふるものあり、予の此語を聞く

や感慨無量、自から過ぎにし昔を追懐して、同情の感甚だ切なり乃ち獨り此語を反覆して曰く、嗚呼永久不滅の信仰に非ずんば到底又我を慰むること能はずと

人其境遇を同じくすれば語る所多く相同じく、遭遇する所甚類似す、同年の人、同郷の人、同位の人、同職の人、彼等互に相親しむは固より其所也、然れども彼等必しも衷心同情の念切なるものに非ず、獨り同境の人、交り未だ深からず、信する所必しも同じからず、學ぶ所又相異なるものありと雖、時に際して花、涙を濺ぐの情、骨肉の間に異ならざるものあり、一面の舊識なきの人と雖、予、時として其愛を聞くや之が爲に走らんと欲し、其不幸を知るや之が爲に慰むる所あらんと欲す。

言ふを止めよ汝は是厭世悲觀の人なりと、人生五十年一度は其慈親と分けざるべからず、其兄弟と離れざるべからず、其妻子と別れざるべからず、或者嘗て曰く人其父に分るれば必ず其性格を變ずと、子として親を思ふの情、よし其性格を變せざるも其腦裡に至大の印象を刻すべきや必せり、一代の歴史は確に此時に於て一線を劃すべければなり、知らず此最後の袂別に際して爾は尙冷然として笑ふことを得べきか、抑、爾は何を以て爾の悲哀を慰めんと欲するか、爾は何を與へ又何を遺さんと欲するか、我が聞かんと欲する所は此時に於ける爾の信仰なり、人生は喜劇に始り悲劇に終るものなり、而して此最後の一幕閉ぢんとする時再び光明の世界に入るべきか、將た又闇黒の世界を現すべきかは、演劇者も傍觀者も其

に須らく顧慮すべきの問題なり、我心は公明正大なり、我心は至誠を旨とし俯仰天地に耻づることなし、我は本来自信の強きものなり、我意見は人より勝れたりと思ひ、我主義は人よりも善きものなりと思ひ、我が財産、我體力は人よりも貧しく人よりも弱しといへども我學問、我事業は一步も人に譲らざるべしと信せり、然れども我最後の問題は哲學、科學、論理を以て遂に解釋すること能はず、唯、一切智の指導する所に任せり、一切智とは何ぞや即佛陀是なり。

我が有限の生命に永久不滅の活力を與へたる者は佛陀なり、我が健全なる時、我を勵まし、我を鼓舞するものは佛陀なり、我が病める時我を慰め、我を勞はる者は佛陀なり、我に勇氣を與へ、我に熱心を與へ、我に生命を與ふる者は佛陀なり、佛陀は實に我最初の救済者にして又最後の慰問者たるなり、宗教は實に人心の奥底に存する最深の感情なり、容易に捕捉し得べくして容易に捕捉し得べからず、其一度逸するに當りてや多く斷常の二見に陥り、又空觀に墮落す

宗教は又實に人をして大智見を開悟せしむる最後の斷案なり、然れども大智門は制して開くことなく、大悲門は開きて遮するとなし、ターレス以後二千年間の哲學史は皆此智門を開かんが爲に努力せし痕跡なり、彼等の努力は歴々として見るべきも、其最後に到達せし眞理は、其當時の最高精神を表現するに過ぎず、箇々の小宇宙をして各、其自性に適合する世界觀人世觀をなさしめよ、學術と經驗が齎す所の結果は人間進歩の歴史たるのみにして其最後の證信より顯みれば、凡て

の經驗的認識は極めて微少なる價値を存するものに非るか、否其効力は實に偉大なるべし、十年前の經驗と今日の經驗とは我に於て雲泥の差あるを見れば誰か學術と經驗に對して其價値を認めざるものあらんや、唯夫れ最後の證信に對すれば之に先だつものは皆微弱なる光りを放つと、恰も彼の中夜燈々たる星辰が曉天の日光に對して漸く其光りを失はんとするに類せんのみ

然れども智門は堅く閉ぢて容易に開かず、所謂知識より來るべき最後の證信は必しも不滅の信仰ならず、必しも人生の闇黒を照すべき光明ならず、又必しも苦しみを救はんとする慰問の宗教たらず、苦みの淵を出でんが爲には先づ佛陀の大悲を見よ、

闇黒を照さんが爲には先づ攝取の光明を見よ、宗祖嘗て曰く「煩惱に眼さへられて攝取の光明見ざれば大悲ものうきとなくして常に我身を照すなり」と、大悲門は此の如く其門戸を開きて我等を入るゝに吝ならず、我等先づ此門に入て不滅の信仰を得たり、

信仰を稱するに智見を開くといは、即智と稱せよ、其歡喜報恩の念躍々として起るを見て、其感謝の情に名くるに是感情なりといは、即しかく稱せよ、決定的意志の強固なるを見て其不動の念に名くるに是れ意志の力なりといは、即又此の如く稱するも敢て不可ならず、「名は是れ響きのみ、煙りのみ」、名目は余輩の問ふ所に非ず、宗教的精神は、吾人が全幅の精神を傾注するの時常に其片影を顯現すべし、ヘエダルは皆

て謂へらく宇宙の神秘秘密は思想の權力に對して抵抗する力を有せず、思想の前には宇宙は其豊富深遠なる秘奥を吾人の眼前に示現し以て吾人を樂ましめ、自から其門戸を開かざるべからずと知識は此の如く一切の秘奥を開き、之が解釋をみんとす、然れども翻て人生を見る、學は廣くして生命は短、宇宙の秘密開かんと欲して開く能はず、天地の寓意、解かんと欲して解くと能はず、二十八年の春秋を重ねるも依然として尙當年の阿蒙、ファウスト開卷第一葉の語を讀して曰く

「嗚呼我の如き憐むべき愚物よ」

思を主觀的考察に耽らし、心を世界觀に馳する時は宇宙の我あり、我の宇宙あり、氣宇瀾大の感自ら之に伴う、去て思を客觀的事相にめぐらし、心を人生觀に轉する時、却て「ボエチウス」が哲學慰問論に一編の涙なきこと能はず、嗚呼狡兔死して良狗烹らる、ネローの爲に死せしセネカの最期を見よ、アントニヌスの爲に倒れしバビニアヌスを見よ、威權爛々たる榮華の夢醒めて、一度其位地を代うるや、彼等は皆罪なくして非命の終りを遂げしにあらざるや、とは此の如き同一の境遇に陥りたる「ボエチウス」が「チシム」の牢獄にありて記する所、人生の未來茫乎として其榮枯盛衰の圖るべからざる此の如し、此朦朧たる前途を照すものは、常住不變の燈火に非んば頼むに足らず、何ぞ又智眼の闇さを嘆せん、大悲門に入て直に慈眼の彌陀を見、其秘鍵を探て大智門を開かば不滅の信仰は此に成立すべし

或人の曰く、我信仰は未だ確立せず、我は今尙疑惑の中にあり、我は未だ人の前に立ちて、我信仰を表白すること能はず、我は信仰なくして信仰ありと偽り、或は表に清浄の徳相を現して、裏に不潔の悪徳を行ふの偽善者を惡む、我は偽善者たらんよりは寧ろ懷疑の人たらん、我は自ら欺き又人を欺くこと能はず、此の如き人は未信の人なり然れども汚れたる人に非ず、清らかなる人なり、其言ふ所を見るに少しも飾りなく其行ふ所を見るにわざとらしき所を見ず

此の如き人は良心の光明、明かに照して其日常の行爲、其平生の道徳決して過りなきの人なり、此の如き人は知識の人なり此の如き人は多く自律主義の人なり、此の如き人は誇るべからず、我常に此種の言を聞く毎に、我は偽善の人に非るやと願ひ、其言行多く相一致せざるを見ては「爾は實に大偽善者也」と罵るの聲、迅雷の如く響き渡るを見る、我は此の如く論るべきものを有せず、我は弱き者なり、我は不完全なるものなり、我命は有限なり、此に於てか益々無限を望み完全を仰ぎ、心身兩つながら健全ならんことを希求す、我信仰に明滅あり、冷熱あり、時として燃ゆるが如く、時として殆んど全く滅するが如く、我行爲に表裏あり、時として邪念妄想百出して方規の外に逸す、我思想に浮沈あり我感情に變遷あり、一切の事物、起居動作皆此の如し、我此に於てか益々不滅の信仰を希求す

以て服膺すべきの語となす、然れども自から願みれば一として行ふ所あらず、受くる所與ふるより大に、與ふる所受くるより小なり、而して常に與へたる所を思ひ、受けたる所を忘る、愚童持齋心の時として羶羊に類せんとするは誠に憐むべきなり、諺に曰く人は是れ神と悪魔との界に立つと、一步を轉ずれば是れ實に悪魔の世界なり、ピタゴラス派の學者嘗て曰く「道徳は常に相同じと雖、悪弊は種々の變形を有す」と惡徳の變態、其數を増加するは喜ぶべきことに非るなり、是れ實に悪魔の世界に近くなり、夫れ正道は一なり、行くべき道は唯一なり、不滅の信仰は我等を導きて此唯一の道を取らしめ而して能く悪魔を征服せん、是れ予が君に告げんと欲する所なり。

會報

信濃國

◎真宗松代教會 同會幹事の相澤藤吉氏は同會總代として、十六日長野市に出て、本多學士を迎へて、十七日松代町に歸り、午後一時演說會を開けり、同町は眞田氏の舊城市にして、信州の高頭なりしが、今は衰へて人口も大に昔日より減じ、今は製絲業の盛なる外、別に繁盛なる産業もなし○又同教會は創立以來已に十餘年を経て、名の證する如く、共に眞宗の教旨を奉ずる人々の團體なり、然るに其最注目すべきは、同會の幹事として幹旋せられ、眞宗の教旨を喜ばるゝ人々の中には、生來眞宗の人は相澤氏のみにして、他は皆他宗派の人々なりしにあり、又同會幹事の一人なる石川嘉助氏の如きは生來大酒家なりしも、先年反省會に入會して以來一滴も飲用

せずといふ、是を以て見れば彼反省會の運動が一時奏功せしは確にして、而も今日の有様に至りたるは惜むべしとす、扱會場は同町勝蓮寺にして、演説は十七日午後及び夜、十八日の午後なり、其他十七日夜には同町製絲工場六文錢合資會社に至りて、工男工女三百數十人に向て一席の講話を施され、十八日夜は同製絲工場松城館にて四百人程の工男女等に講話せられたり、因にいふ右の二工場は眞宗教會に於て、教誨を引受け時々講師を聘して講和を誦ふと、且工女等には毎夜普通教育を施し居るなり、此他猶製糸場は五箇所程ありて、何れも盛大なりと

一金五圓也 清國杭州銀洞橋日文學堂内伊藤賢道殿

右御寄附を辱らし御高志の段玆に謹て謝意を表し候也

本部廣告

注意

一領收證を望まると方は必ず端書或は三錢郵券封入の事
 一照會は必ず相當の返信料を添ふる事
 一轉居の節は新舊兩所共御通知の事

老川遺稿出版費義捐廣告(第一回)

- 金壹圓 寶開教君
- 金貳圓 佐竹親海君
- 金三圓 北條太洋君
- 金三圓 正來令法君
- 金三圓 松平治郎吉君
- 金三圓 田中太左衛門君
- 金三圓 渡邊隆勝君
- 金三圓 朝月憲太郎君
- 金三圓 田代直樹君
- 金三圓 福田太郎兵衛君

- 金三十錢 曾我是一君
- 金二十圓 古田復之君
- 金十圓 正木新君
- 金十圓 來馬琢道君
- 金十圓 喜多幅武三郎君
- 金十圓 毛利清雅君
- 金十圓 大原最遊君
- 金十圓 植松伊八君

小計金十九圓五十五錢也

勝友叢誌

每月一回五日發行
 一部代金六錢(郵稅共)
 一ヶ年分七十二錢
 總て前金申込の事

- ◎本誌は素と獄窓の下にある可憐の同胞に一道の光明を與ふる勝友として世に出しものなり
- ◎しかるに本誌は現に又多くの家庭に清潔なる空氣を供給する最良の機關として歡迎せられつゝあり
- ◎更に本誌は汎く社會に向て健全なる徳義を鼓吹する木鐸たらんことを期す
- ◎故に本誌は在學者への恰好の差入物なるのみならず教育宗教家及慈愛なる父母の座右に缺くべからざる良冊子なり
- ◎本誌の誕生は遠く一昨年あり而して最近の發刊にかゝるは第二編第三輯なる其目次は左の如し
- ◎説話○年の始(文學博士村上專精)○室衣座(鈴木法琛)○思ひやり(月見覺了)○史傳○伊藤仁齋(文學士有馬祐政)○雜錄○將去と將來新傳詩(非無)○筆の家づ(越岳)其他○法苑○盡十方無身光如來(多田鼎)○講演○鬼脚の辨(文學士春山作樹)○家庭○交際の快樂(東籬)○をしへ草○學業○通俗算數字一班(春山逸史)○其他

發行所 東京北豊島郡巢鴨村 勝友叢誌社
 千八百八十八番地

文學士 清澤滿之師序
文學士 近角常觀君著

信仰の餘瀝

全 一 冊
寸 珍 美 本
紙 數 百 頁 餘

●特別減價一部金十二錢但郵稅共●郵券代用一割増の事

本書は著者曩に一たび政教紙上に掲げ、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、吾人人生の大問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。

清澤師本書に序して曰く、
宗教は人心をして其根帯を自覺せしむるものあり、信仰は即ち其自覺あり、社會にして宗教を欠くは、其發展の一大要素を欠くなり、個人にして信仰の立たざるは、未だ其根本的不明を斷ぜざるあり、吾人の從來する所如何、吾人の趣向する所如何、吾人の價值は如何、吾人の運命は如何、凡此等吾人々生の最大問題は、一として最後の信仰に繫屬せざるものあることなし、宗教的自覺の世道人心に必要なること論を待たざるなり、(畧)近時宗教を喚呼する聲の甚大にして信仰を告白する説の甚盛なる如きは皆以て徴とするに足る、近角君の如きは最早此聲にきき、最早此告白を試みたる一人なり、(畧)これ固より君が信仰の餘瀝の過ぎざるもの、未だ以て君が信仰の全般を盡す能はずと雖も、君が如何に宗教を觀取し、如何に之を實驗し、如何に之を玩味せるかは、此數篇の間に於て之を瞥見し得べきが如し云々
と、以て本書の價值如何は畧々の辯を費さずして可知也、苟も宗教的の信念に厚き士は、一本を座右に供へ熟讀玩味せられむことを希ふになん、謹で告ぐ

注意 本書は前金にあらざれば送本せず●十部以上割引す
照會は必ず往復はがきに限る事 ●「政教時報」と別會計なるを以て雑誌代の中より差引すると堅く御断の事
●若金の順序によりて直に送本す

既刊發賣

發行所

●東京本郷森川町一番地

大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十一年十二月二十六日逕信省第三種郵便物認可
明治三十四年一月十五日發行〇毎月二回(一日、十五日)發行

政教時報第四十七號